

言葉の魔法

皆さんは、言葉には不思議な力があると思ったことはありませんか。普段使っている言葉一つ一つを、意識して使っていますか。特に意識せず、何気なく使っている人がほとんどではないでしょうか。

私もある先生のお話を聞くまでは、言葉に対してあまり特別な感情はありませんでした。その先生はこうおっしゃっていました。「人は人に対して言葉という魔法が使えます。」と。言葉というのは想いを込めるだけで、聞いている相手を喜ばせたり、照れさせたり、怒らせたり、悲しませたりと、人の心を動かせる魔法になるというのです。この話を聞いたとき、私は感心すると共に、とても共感もてました。それは、私自身もそれに似た経験をしていたからです。

中学時代の野球の試合での事です。大会の準決勝、私は失点につながってしまう大きなミスをしてしまいました。試合後、監督にも怒られ、ショックで深く落ち込みました。その気持ちを次の試合まで引きずってしまい、試合が始まる前から緊張と不安でいっぱい。ミスをするのが怖くて消極的なプレーばかりになり、それが悪循環となってまたミスをくり返す。チームの足を引っ張っているのが苦しく、もうやりたくないと感じてしまうほどでした。一人、孤独な気持ちで沈んでいたとき、控えの選手が寄ってきて私にこう言ったのです。「どんまい、どんまい」「楽しんでいこうぜ!」「エラーして負けても死ぬわけじゃないんだから」この言葉をきいたとき、なぜか気持ちがふっと楽になりました。緊張や不安がすべて消えたわけではありましたが、野球に対する恐怖感がなくなりました。本来なら私たちレギュラーの不甲斐ない試合運びに、不満の一つも言ってよさそうなものなのに、同じ気持ちになって励ましてくれる控えの仲間たちの言葉がとても嬉しく、「そうだ、一度や二度の失敗なんてどうってことない。それより、チームの勝利に貢献することを考えよう」と一気に気持ちを切り替えることができました。その心境の変化もあってか、私たちのチームは快進撃し、全国大会のキップを手に入れることが出来たのです。

仲間が言ってくれたこのなにげない一言が、先生のおっしゃっていた言葉の魔法なのだと思います。さらに先生は、「この言葉の魔法は、使い方を間違えてしまえば、ケンカやいじめの原因にもなる。」ともおっしゃっていました。私は、そのひと言が気にかかり、言葉というものがいったいどのようにして人々に関わっているのか、深く考えてみることにしました。

先に述べたように、言葉には人の心を喜ばせたり、怒らせたりする力があります。という事は、人を傷つけたり、追い込んだりする事もあるのではないかと私は考えました。連日、テレビや新聞でいじめの問題が取りざたされています。特に最近気になるのは、言葉を使った、精神的に追い詰めるいじめです。よく身体に受けた傷は治るが、心に受けた傷は治らないと言われます。実際、インターネットの掲示板などへの悪意に満ちた書き込みで、傷つき、それを苦に自殺してしまった、という悲しい話も聞かれるようになりました。言葉が持つ力を、間違った方向で使えばどうなるのか、その答えは、現代の社会問題にはっきりと示されています。

では、このような悲劇が起きないために、人が言葉と上手に付き合っていくにはどうしたらいいのでしょうか。私はまず、お互いが言葉には不思議な力があるということを実感することだと思えます。昔から「言霊」という言葉が存在するように、言葉には魂が宿ると言われています。憎しみを込めて言えば呪いになりますし、愛情を込めて言えば祝福になります。良くも悪くも、言葉には言った通りになる力があるのです。そう思えば、簡単に「死ね」「キモイ」といった言葉は口にできないはずですが。逆に「嬉しい」「楽しい」という言葉を口にすれば、より嬉しく、より楽しく感じるものです。一番大事なのは、言葉一つ一つに自分の心をちゃんとこめているかどうかです。相手の気持ちを思いやって、心からのメッセージを伝える。想いのこもった言葉はたった一言でも、波紋のように伝わっていきます。あの時、仲間がかけてくれた言葉が私の気持ちを癒してくれたのも、彼らの温かな想いがあってこそでした。

私たちにとって言葉とは何なのでしょう。どんなに便利な世の中になろうとも、人と人との関係が便利で簡単になるわけではありません。人の世の歴史が続く限り、言葉は私たちの人生をつなぎ、彩ってくれるものとして、これからも深く関わってくることは間違いありません。今を生きる私たちは、将来どんな世界に出会うのでしょうか。憎しみ、互いに傷つけあう世界でしょうか。それとも明るく、笑顔に満ちた世界でしょうか。どちらの世界が見えてくるのか——それは、魔法使いである私たち一人一人の想いにかかっています。さあ皆さん、今こそ、笑顔あふれる言葉の魔法をかけていこうではありませんか。

(平成22年2月 那覇高等学校図書館発行 生徒作品集『綾』 第35号 掲載作品)